柳俳歌壇

「淡水俳句会この一年」

中杉隆世（学部7回）

令和2年から猛威を奮った新型コロナウイルスも令和5年の今年に入って漸く収束しつつある。この間、淡水俳句会も淡水サロンが再開出来るまでメール、ファックス等工夫を凝らして例会を継続し5年10月には144回に達した。年刊句集『淡水俳句』の方も順調に刊行され現在12号まで出版されている。

会員は神戸高商20回卒でホトトギス同人の平岡良一氏が退会され、学部15回の小林征雄氏と社会人入学で修士となられた種田由紀子氏、清水修氏推薦の「運河」「かつらぎ」所属の宙船白帆氏が入会。11月からは学部28回卒の羽室毅氏が入会され、会員数は16名になった。学部4回の高野虚石氏、学部5回の有元洋剛氏は90歳を超えて尚矍鑠。私は本年3月に三重県の津から東京都の調布へ転居し淡水俳句会とはパソコンのメールで選評を行う事となった。

中杉隆世

例に依りこの一年、私が特選及び秀逸に選んだ句を掲げます。

大根洗ふまつ正直にまつ白に　藤井　啓子（令和4年11月）

冬の日とともに三十分座る　藤井　啓子（同11月）

しぐれけり山の辺の道歩きゐて　清水　修（同11月）

レノン忌と言ふ人もあり開戦日　今城　公徳（同12月）

お互いにマスクの顔になじみけり　藤田　公昭（同12月）

探梅といふ水分の小賑はひ　清水　修（令和5年1月）

黎明の原生林に淑気満つ　清水　修（同1月）

初午や千本鳥居くぐり行く　今城　公徳（同2月）

二ン月の明石大門の光かな　横井　司（同2月）

淡水句集第12号
ご希望の方は事務局まで

昏れてなほ連翹の黄の輝やけり　今城　公徳（同3月）

春狂ふ妻逝きし夜入院とは　有元　洋剛（同3月）

陸奥は花曇はた霾ぐもり　清水　修（同4月）

さくらごと湖に浸かるや竹生島　高嶋　衞（同4月）

子供の日嬰の和毛に野花挿し　種田　瀬音（同5月）

廃屋の藤満開となりにけり　清水　修（同5月）

生き延びて又来る夏を怯えをり　有元　洋剛（同6月）

打水や花見小路の昼下がり　今城　公徳（同6月）

左褄とりて茅の輪をくぐりけり　今城　公徳（同7月）

白砂に轟く蝉のしぐれかな　横井　司（同7月）

風鈴の紐切れしまま鳴りもせず　高嶋　衞（同8月）

夢殿の空青かりし初嵐　清水　修（同8月）

通り雨過ぎし瀬音の涼しさよ　藤田　公昭（同9月）

乳牛にモーツアルトや秋の空　横井　司（同9月）

赤い羽根しやがみて付けてもらひけり　今城　公徳（同10月）

戯るやアサギマダラと藤袴　藤田　公昭（同10月）

選者吟五句

中杉　隆世（学部7回）

侘助の木に侘助の花が咲く
明易き山亦山の果てしなく
闘ひて生き残りたる黴ならん
見まほしき月の都といふところ
鳴き休む蟲鳴き代る蟲のゐて

中杉隆世選

高野　虚石（学部4回）

夕立晴明日のルートはジャンダルム
残り雪素足に下駄の湯屋巡り
薬の日生かされている命かな
花曇り人待つ人やさりげなく
縒り捻れ頑固の九十星月夜

有元　洋剛（学部5回）

セピア焼けのケインズに逢ふ曝書かな
亡き妻の声かつくつく法師蝉
あの世では絶対咲かぬ曼珠沙華
牡蠣舟の傾ぎ灯点す爆心地
日々好日百八つ目の鐘を撞く

北山　斗星（学部7回）

ケアハウスたわわに実る柿の道
ケアハウス薄味に慣れ春来る
ケアハウス窓に癒しのチューリップ
ケアハウス白粉花と暮れにけり
露の世やしらじら明けるケアハウス

中野　湘舎（学部11回）

卯を覗く寅隅にゐる賀状かな
火も水もめでたきものよ初不動
あたたかや投句箱まで足伸ばし
余花に逢ふさらに逢ひたし父母に
海の日の海風の繰る季寄かな

種田　瀬音（三木ゼミ院平成6年卒）

凧合戦終へていつもの空戻る
朴の花空の青さの近づきぬ
おくるみの嬰のごとくに箱の桃
漬物樽並びし納戸ちちろ鳴く
静けさの中に身を置く紅葉かな

清水　修（学部10回）

初み空神馬嘶きゐたりけり
公園に移動図書館花ミモザ
万緑や一番筏幣たてて
霧ふれてゆく唐松の音微か
冬鷗とぶ北欧の貨物船

今城　公徳（学部15回）

酒蔵の利き酒めぐり春浅し
春灯や障子に跳ねる指狐
カンツォーネ聞こゆる家にミモザ咲く
秋遍路うしろ姿の影長し
白桃を躊躇ひながら切りにけり

藤田　公昭（学部15回）

戯るやアサギマダラと藤袴
通り雨過ぎし瀬音の涼しさよ
お互いにマスクの顔になじみけり
愛犬に合羽を着せて梅雨の入り
掃き寄せてアートを作る落ち葉掻き

小林　征雄（学部15回）

木枯らしが重たい雲も連れて来た
暦より大きく遅れ冬に入る
カミさんも記念日忘れた神無月
昼カラや拍手多くて暮れ易し
サッカー子半袖半パン我はダウン

羽室　毅（学部28回）

落葉降るさらさら風の囀りが
襟元を木枯らし元気に通りゆく
秋麗隣の柿のいつ落ちぬ
ベランダの奥まで陽のさす冬ぬくし
襟巻に感謝の思ひ朝歩き

髙嶋　衞（学部28回）

枯蓮やへの字くの字にのの字まで
北窓を神戸刑務所塞ぎをり
大雪といふ静けさの積りをり
春風がうしろから来て乗れと云ふ
ぼろぼろな駝鳥のやうな枯れ蓮

西村ひとみ（学部33回）

鶴折るや一つ増えたる祝箸
黙祷の静けさ破る法師蝉
でで虫の殻に色つけ名を与へ
秋の日やビルの谷間の野点傘
裾を踏みつつ壇上がる七五三

山田　早弓（学部34回）

病床の頬くすぐるや春の陽よ
空き部屋の時計が刻む春の陽よ
荒れ庭にそれでも咲きし水仙よ
忌の明けて初夏の日射しに戸惑ひし
雨匂ふ遂に語らふ人も無し

宙船白帆（特別会員）

納棺の不慮の死といふ日焼顔
鷹渡る一羽一羽と間を置いて
ベースボール俳句を談ず子規忌かな
心まだ二十歳のままに木の葉髪
航海も楽し夜ごとの流れ星

横井　司（特別会員）

二ン月の明石大門の光かな
蛸壷の句碑の向かうに春の雲
秋立つやカッターナイフよく切れて
乳牛にモーツァルトや秋の空
別れてはしぐるる景となりにけり

難波　和子（特別会員）

天界の飛脚の如く星走る
隙間風闇の向かうの気配かな
若葉かな刺子のやうに山を縫ふ
手折るには手強し秋の七草よ
寂しさの塊蹴るや秋の夢

「淡水俳句会」会員募集

初代顧問は旧神戸商大英米文学教授「橋閒石先生」。

現主宰は創立者中杉隆世（学部7回・ホトトギス・東京調布市在住）。昨年、4名の新会員を得て現会員16名。毎月第3木曜日句会開催。

昨年（2023）10月で144回。神戸三宮淡水サロンにて開催。学生、初心者、大歓迎。

※世界一長寿国の日本、仮説だが、これは「俳句人口」「韻文愛好者の数」の多さが頭脳の活性＝長寿率かも。

髙嶋　衞・記